解析し、毒性値を計算した。最終濃度方による毒性値(EC50 値)の再計算結果は下記の通りであった。

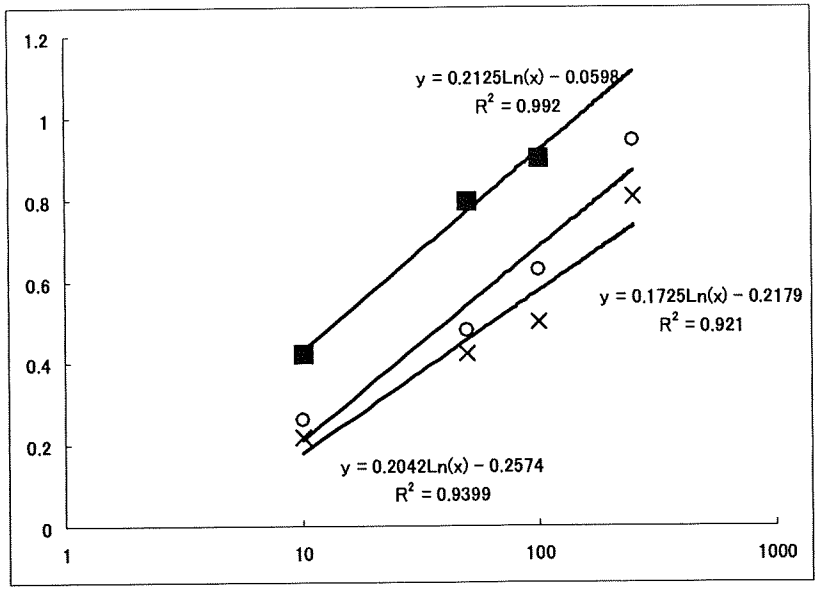
o-Aminophenol	y = 0.2125Ln(x) - 0.0598	14 mg/L
m－Aminophnol	y = 0.2042Ln(x) - 0.2574	41
p－Aminophenol	y = 0.1725Ln(x) - 0.2179	64

ただし、OECD-TG201(2006)の妥当性基準は満たしていないこと(試験期間中に現存量の増加は16倍未満であった、繰り返しが少ないく測定値の変動が小さいことを示せない)から試験の信頼性は高くない。その結果、o-異性体の毒性が他の２つの異性体に較べてやや強いことが分かった。

(表2) Huang, J.C., and E.F. Gloyna(1967)の試験データ

曝露濃度(mg/L)	o-Aminophenol			m－Aminophnol			p－Aminophenol		
	0日	1日	2日	0日	1日	2日	0日	1日	2日
Control	10.4	24.6	76.8	10.4	24.6	76.8	10.4	24.6	76.8
10	10.4	12.8	44.4	10.4	24	60	10.4	22.8	56.8
50	10.4	8.8	15.6	10.4	18.4	44.4	10.4	16.8	40
100	10.4	3.6	7.6	10.4	10	38.5	10.4	9.6	28.8
250	10.4	2.8	2.4	10.4	9.6	14.8	10.4	5.6	4.4
500	10.4	2.8	0	10.4	8.8	8	10.4	0	0
1000	10.4	－		10.4	6.4	4.4	10.4	－	－

試験開始後2日までの藻類密度の変化をクロロフィル濃度の測定値でしめしている。



（図４）生長阻害率（縦軸）とばく露濃度（横軸、対数）との関係
■：o-アミノフェノール　×：m-アミノフェノール　○：P-アミノフェノール

⑦環境省は、m-および p-アミノフェノールを単細胞の緑藻の 1 種 *Pseudokirchneriella subcapitata* を使った OECD-試験ガイドライン 201、藻類生長阻害試験を GLP 基準を遵守して実施した。被験物質は試験条件で安定ではなかったものの p-アミノフェノールの場合分析の結果、試験終了時でも低濃度区で 50%、高濃度区で 25%ほど残存していることが確認されており、毒性値の信頼性を疑うほどではなかった。また m-アミノフェノールではばく露濃度は p-異性体よりも高かったものの濃度はほぼ維持され被験物質は水中で安定であった。試験結果は p-アミノフェノールが m-異性体よりもはるかに毒性が高い結果となった。

8.3.3.4　原生生物への影響

⑧Pauli et al. 1993 および Pauli & Berger, 1992[10]は、繊毛中類のテトラヒメナを用いた m-および p-アミノフェノールの短期毒性試験を行った。この試験の毒性指標は２つあったが忌避行動については必ずしも毒性を示しているものでないので試験の信頼性は低いとし、生長を指標とした毒性値のみを妥当であると判断した。試験方法は、藻類生長阻害試験に準じてテトラヒメナの生長（増殖）を影響指標に 48 時間後の到達密度を計測して、対照区の増殖率から各濃度区の生長阻害率を算出し、設定濃度との関係から 48hEC50 値および NOEC 値を算出している。ばく露濃度区は等比級数で設定しているものの、公比が大きいことから、毒性値そのものの信頼性は高くないが、m-異性体と p-異性体の毒性の比較には十分な情報が得られると判断した。

算出された毒性値を較べると、m-異性体よりも p-異性体の方が 10 程度毒性が高い結果であったが、NOEC 値はまったく同じであったことから、p-異性体の方が毒性が高い傾向にあるものの、藻類ほどには大きく変わるものではないと判断された。

8.3.3.5　水生生物の慢性毒性影響について

９）環境省は、オオミジンコの繁殖試験を m-および p-アミノフェノールについて実施している。OECD 試験ガイドライン 202、Part 2 の試験法で、GLP 基準を遵守して実施した。両物質ともに流水式ばく露方式を採用していることから安定したばく露が実現できたと考えられる。試験法からの逸脱事項はなく、試験の信頼性は高いと判断された。

得られた毒性値は、m-異性体よりも p-異性体が 10 倍ほど毒性が高い結果となった。

⑨環境省は、p-アミノフェノールのメダカを用いた初期生活段階試験を実施した。試験は OECD 試験ガイドライン 210 に従い、GLP 基準を遵守して実施した。試験法からの逸脱はなく、得られたばく露濃度―反応関係は予測の範囲であり、得られた毒性値の信頼性を高いと判断された。ただし、他の種類の異性体の試験結果は入手できないために、毒性の傾向の解析には使用できない。

８．４．リードアクロスの適用可能性の検討

8.4.1　魚類急性毒性

ゼブラフィッシュの胚毒性試験値は魚類の急性毒性試験のよい近似値となることを根拠に、ゼブラフィシュを用いた魚類胚毒性試験が OECD 試験ガイドラインとして提案されている。ところが Sun et al.(2004)の結果は、メダカの急性毒性試験結果とまったく逆の傾向を示している。そのため、ここでは魚類胚毒性と魚類急性毒性とは別のものとして判断する必要がある。メダカの o-アミノフェノールの毒性情報を入手することがますます重要となった。そのために、他の類似の化合物の毒性値も

含めた検討が必要である。

ただし、この３つの異性体間でその毒性が大きくことなることは確実であり、また、その場合の合理的なパラメータとしては、生体膜透過性の指標である LogKow や水中でのばく露の可能性を示す水溶解度などではこのように大きな毒性の違いを説明できないので、別の指標とすべきである。

8.4.2　ミジンコ急性毒性

m-異性体よりも p-異性体の毒性が高い傾向が示されてはいるものの、実験的な誤差を考慮すると必ずしも毒性に差があるとは言えない。したがって、o-異性体の毒性は m-および p-異性体程度の毒性であることになる。ただし、他の生物分類群では際だった毒性の違いが見られていることからその結果には留意する必要がある。

8.4.3　藻類への影響

Pseudokirchneriella subcapitata（ミカヅキモの１種）とクロレラの２種類の緑藻について複数の異性体の毒性値が得られているが、その毒性傾向はまったく異なるものであった。クロレラに関しては大きな各異性体間の感受性差は小さいものの、*P. subcapitata* の場合は m-異性体と p-異性体で毒性値は1000倍以上の差がある。この違いは決して実験誤差とは考えられない。この緑藻２種の間の毒性傾向の差の理由に関しては情報がないこと o-異性体の毒性値をリードアクロスの手法で推定する場合は LogKow をパラメータとすることでは対応できない可能性が高い。

8.4.4　微生物への影響

バクテリアを用いた生態毒性試験に関しては発光バクテリアを用いた試験法以外には情報がなかったが、毒性が高いとする情報も得られていないことから３種の異性体それぞれについて試験を実施することが望ましい。カテゴリーアプローチによるデータフィリングが有効かどうか判断は困難である。

原生生物である繊毛虫類のテトラヒメナの場合は、生長を毒性指標とした EC50 値からは m-アミノフェノールが p-アミノフェノールよりも毒性が高いとの結果であったが、本化学物質の特性の１つとして、試験環境中で被験物質がオリゴマーを形成した場合には毒性の緩和が起こる可能性があり、ばく露濃度の高い時ほど高分子化が進行すると考えられ、しかも試験の実験誤差が大きくなると予測される。テトラヒメナでは NOEC の比較では m-異性体、p-異性体の値は同じであり、異性体間に毒性に関する差は小さいとも考えられる。このように、２つの逆の可能性があることから、毒性傾向を推測するには至っていない。

8.4.5　水生慢性毒性値

ミジンコ繁殖を影響指標とするNOEC値がm-およびp-異性体でえられている。m-異性体よりもp-異性体の方が毒性が高いこと、そしてその傾向はミジンコ遊泳阻害試験の結果と同じ傾向であることから、この毒性傾向は確かなものと見られた。しかしながら、o-異性体の毒性値をm-およびp-異性体の毒性値から推定する手法については、従来のLogKowのような生体膜透過性の指標をパラメータにしては、異性体のように物理化学的性状の類似した化学物質で毒性値がこのように異なる場合には成功しないことは明らかである。

８．５．結論と考察

アミノフェノールの３種異性体の入手可能な環境毒性情報についてその利用可能性について整理した。LogKow と化学物質感受性の相関関係についてはすでに多くの知見があり、実践的にも QSAR（量的構造活性相関）式が LogKow をパラメータとして開発・利用されてきている。

一方、アミノフェノールが属する１）芳香族

アミンは、ミジンコへに高い毒性を有するなど、一般的に生理活性が高いこと、2）同じく芳香族アミンは急性ー慢性毒性比が例外的に高い化学物質が見られること（繁殖影響が著しい）の特徴を有することが知られている。さらに3）フェノール類は、魚類の初期生活段階（胚期、仔魚期）に濃度依存性が弱いものの致死的な影響が見られるという特徴がある。

さらに、アミノフェノールは、試験環境中で高分子化するとの報告があり、このことは、ばく露濃度の高い濃度区の方が高分子化率が高くなることから毒性に関与する単分子（場合によってはオリゴマー）の濃度が、高濃度区と低濃度区が同程度もしくは逆転することもあり得る。この事は、ばく露方式の選択にとっても重要である。具体的には流水式ばく露方式を選択した場合に高濃度の保存溶液を準備するが、この保存溶液の中で高分子化が進むことがなかったか確認する必要がある。今回入手した試験結果においては、流水式試験のすべては被験物質濃度を実測し、その実測濃度に基づいて毒性値を算出しているか、もしくは十分に低い濃度での試験であったために試験の信頼性に疑問のある試験はなかった。止水、半止水式ばく露試験をおこなった試験においても、設定濃度に基づいて毒性値を算出している場合には、常に高分子化に伴う毒性緩和が起きていないか疑問が残る。既存情報の場合にはその確認ができないため、試験結果をどのように受け入れるべきか判断が難しい。

このように、アミノフェノール類の試験結果は通常の物質に較べて試験手順による試験結果の変動が大きいという特徴がある。その場合、試験手順が十分に吟味されており、またその詳細が記述されている試験結果だけを用いて毒性を評価することが必要である。その点では、今回は信頼性の確認の段階で多分に広めに利用できるものとして整理した。

集約した試験結果は、用いた生物種、成長段階によって異なる毒性傾向がみられている。種によるターゲット部位が異なるための違いであるのか、代謝酵素系の有無による差なのか、毒性メカニズムそのものの検討は行っていないためここでは解明できなかった。今後はそのような方向からの検討が必要である。

研究発表

1．論文発表

Wang J, Sawyer JR, Chen L, Chen T, Honma M, Mei N, Moore MM. ;The mouse lymphoma assay detects recombination, deletion, and aneuploidy. *Toxicol Sci*, 109(1),96-105,(2009)

Yatagai, F., Sugasawa, K., Enomoto, S., and Honma, M. ;An approach to estimation from DSB Repair Efficiency. *J Radiat Res*, 50(5),407-413,(2009)

Morita T, Hayashi M, Nakajima M, Tanaka N, Tweats D.J, Morikawa K, Sofuni T. ;Practical issues on the application of the GHS classification criteria for germ cell mutagens *Regul Toxicol Pharmacol*, 55(1),52-68,(2009)

Pfuhler S, Kirkland D, Kasper P, Hayashi M, Vanparys P, Carmichael P, Dertinger S, Eastmond D, Elhajouji A, Krul C, Rothfuss A, Schoening G, Smith A, Speit G, Thomas C, van Benthem J, Corvi R. ;Reduction of use of animals in regulatory genotoxicity testing: Identification and implementation opportunities—Report from an ECVAM workshop *Mutat Res*, 680(1-2),31-42,(2009)

Takahashi M, Sunaga M, Hirata-Koizumi M, Hirose A, Kamata E. and Ema M. ;Reproductive and developmental toxicity screening study of 2,4-dinitrophenol in rats. *Environ Toxicol*, 24(1),74-81,(2009)

高橋美加、松本真理子、宮地繁樹、菅野誠一郎、菅谷芳雄、平田睦子、広瀬明彦、鎌田栄一、江馬　眞 ;OECD 化学物質対策の動向（第15報）－第25回、第26回OECD高生産量化学物質初期評価会議（2007年ヘルシンキ、2008年パリ）化学生物総合管理学会誌, 5(2),193-200,(2009)

Makris S, Solomon HM, Clark R, Shiota K, Barbellion S, Buschmann J, Ema M, Fujiwara M, Grote K, Hazelden KP, Hew WK, Horimoto M, Ooshima Y, Parkinson M. and Wise LD. ;Terminology of developmental abnormalities in common laboratory mammals (version 2). *Reprod Toxicol*, 28(3),371-434,(2009)

Hirode, M., Horinouchi, A., Uehara, T., Ono, A., Miyagishima, T., Yamada, H., Nagao, T., Ohno, Y. and Urushidani, T. ;Gene expression profiling in rat liver treated with compounds inducing elevation of bilirubin. *Hum Exp Toxicol*, 28(4),231-244,(2009)

Kondo, C., Minowa, Y., Uehara, T., Okuno, Y., Nakatsu, N., Ono, A., Maruyama, T., Kato, I., Yamate, J., Yamada, H., Ohno, Y. and Urushidani, T. ;Identification of genomic biomarkers for concurrent diagnosis of drug-induced renal tubular injury using a large-scale toxicogenomics database. *Toxicology*, 265(1-2),15-26,(2009)

Yoshida M, Sanbuissyo A, Hisada S, Takahashi M, Ohno Y, Nishikawa A. ;Morphological characterization of the ovary under normal cycling in rats and its viewpoints of ovarian toxicity detection. J Toxicol Sci, 34 Suppl 1,SP189-97,(2009)

Yoshida M, Watanabe G, Suzuki T, Inoue K, Takahashi M, Maekawa A, Taya K, Nishikawa A. ;Long-term treatment with bromocriptine inhibits endometrial adenocarcinoma development in rats. *J Reprod Dev*, 55(2),105-9,(2009)

A. Miyajima, M.Sunouchi, K.Mitsunaga, Y. Yamakoshi, K. Nakazawa, M. Usami. ;Sexing of postimplantation rat embryos in stored two-dimensional electrophoresis samples by polymerase chain reaction of an Sry sequence. *J Toxicol Sci*, 34(6),681-685,(2009)

2．学会発表

Honma, M., Kumita, W., and Sakuraba, M.: Demonstration of ionizing irradiation inducing genomic instability via breakage –fusion-bridge cycle in human cells by CGH-microarray. Keystone symposia "Genome Instability and DNA Repair (2009.3)

Honma, M., Koyama, N., Kimura, A., Yasui, M., Takami, S, Takahashi, M., Imai, T, Yamamoto, Y., Kumita, W., Masumura, K., Masuda, S., Kinae, N., Matsuda, T., and Nohmi, T.: Child-adult differences in evaluation of in vivo genotoxicity of acrylamide. 48th Annual Meeting for Society of Toxicology (2009.3)

Kimura, A., Sakamoto, H., Saigo, K., Sukamoto, T., and Honma, M.: Establishment of simple in vitro Comet Assay Protocol. 48th Annual Meeting for Society of Toxicology (2009.3)

Honma, M.: DNA double strand break repair and genomic stability. The 14th Academic Conference of Chinese Environmental Mutagen Society (2009. 7)

Honma, M.: The new ICH guidance on genotoxicity. The 5th National Congress of Chinese Society of Toxicology.(2009.8)

Uno, Y., Kojima, H., Honma, M., Tice, R., Corvi, R., Schechtman, and Hayashi, M.:

In vivo Comet assay: update on going international validation coordinated by JaCVAM. 10th International Conference on Environmental Mutagens (2009.8)

Yamamoto, A., sakamoto, Y., Matsumura, K., Honma, M., and Nhomi, T.: Combined genotoxic effects of a methylating agent and radiation on human cells. 10th International Conference on Environmental Mutagens (2009.8)

Yasui, M., Koyama, N., Koizumi, T., Sakuraba, M., Takashima, Y., Hayashi, M., Sugimoto, K., and Honma, M.: Life cycle of micronucleus analyzed by confocal live cell imaging. 10th International Conference on Environmental Mutagens (2009.8)

Koyama, N., Kimura, A., Yasui, M., Takami, S., Takahashi, M., Inoue, K., Yoshida, M., Imai, T., Shibutani, M., Suzuki, T., Yamamoto, A., Kumita, W., Masumura, K., Horibata, K., Masuda, S., Kinae, N., Nohmi, T., and Honma, M.: Child-adult difference in evaluation of in vitro genotoxicity of acrylamide. 10th International Conference on Environmental Mutagens (2009.8)

Suzuki, T., Kohara, A., Ramadan, A., Kikuchi, Y., Honma, M., and Hayashi, M.: Comparative study of in vitro genotoxicity of ochratoxin A and aristolochic acid as a causative for Balkan endemic nephrophasy. 10th International Conference on Environmental Mutagens (2009.8)

Honma, M., Yamakage, K., Burlingson, B., Escobar, P., Pant, K., Kraynak, A., Hayashi, M., Nakajima, M., Suzuki, M., Corvi, R., Uno, Y., Schechtman, L., Tice, R., and Kojima, H.: Unternational validation study of the in vitro alkaline Comet assay. 10th International Conference on Environmental Mutagens (2009.8)

Hirose, A., Kamata, T., Yamazaki, T., Sato, K., Yamada, M., Ono, A., Fukumoto, T., Okamura, H., Mirokuji, Y., and Honma, M.: Validation of the (Q)SAR combination approach for mutagenicity prediction of flavour chemicals. 10th International Conference on Environmental Mutagens (2009.8)

Honma, M.: The new ICH guidance on genotoxicity. International Conference on Environment, Occupational & Lifestyle Concern- Transdisciplinary Approach (2009.9)

鈴木孝昌、小原有弘、小木美恵子、田邊思帆里、本間正充；8番染色体特異的CGHアレイ解析による各種がん細胞株でのc-myc遺伝子増幅形式の解析. 第68回日本癌学会学術総会(200.10)

Honma M, Takashima Y, Sakuraba M, Koizumi T, Sakamoto H, and Hayashi M: DNA double strand break repair pathways and its dependence on cell cycle phases in human lymphoblastoid cells. Environmental Mutagen society 40th Annual Meeting (2009.10)

本間正充； In vitro遺伝毒性試験における最高用量と細胞毒性の評価. 日本環境変異原学会第38回大会(2009.11)

真田尚和、櫻田直美、米澤豊、入山昌美、本間正充；コルヒチン及び、ビンブラスチンのラット末梢血を用いた小核試験. 日本環境変異原学会第38回大会(2009.11)

小山直己、木村葵、安井学、高見成昭、高橋美和、井上薫、吉田緑、今井俊夫、渋谷淳、鈴木拓也、増村健一、堀端克良、増田修一、木苗直秀、松田知成、能美健彦、本間正充；ライフステージ（週齢）を考慮したアクリルアミドの多臓器遺伝毒性評価. 日本環境変異

原学会第38回大会(2009.11)

安井学、小山直己、高島良生、林真、杉本憲治、本間正充；共焦点ライブセルイメージングによって明らかとなった小核のライフサイクル．日本環境変異原学会第 38 回大会(2009.11)

鈴木孝昌、小原有弘、ラマダンアリ、菊池裕、本間正充、林真；バルカン腎症の原因物質としてのアリストロキア酸およびオクラトキシン A．日本環境変異原学会第 38 回大会(2009.11)

谷田貝文夫、高橋昭久、本間正充、鈴木ひろみ、大森克徳、関真也、橋爪藤子、鵜飼明子、島津徹、榎本秀一、堂前直、大西武雄、石岡憲昭；国際宇宙ステーション利用実験：ヒト培養細胞の突然変異解析から宇宙環境の生物影響を解明する試み．日本環境変異原学会第38回大会(2009.11)

山本歩、本間正充；Unconectable I-SceI サイトの挿入による放射線損傷様二本鎖DNA切断の修復機構の解析．日本放射線影響学会第52回大会(2009.11)

安井学、本間正充；8-オキソグアニン1分子のゲノム内における突然変異誘発能の解析系の確立；低線量電離放射線の暴露モデルとして．日本放射線影響学会第 52 回大会(2009.11)

本間正充、山影康次、Burlingson, B., Escobar, P., Pant, K., Kraynak, A., 林真、中嶋まどか、鈴木雅也、Corvi, R., 宇野芳文、Schechtman, L., Tice, R., 小島肇；In vitro アルカリコメットアッセイ国際バリデーション研究．第 22 回日本動物実験代替法学会総会(2009.11)

The new paradigm of genotoxicity testing in regulatory science –ICH guideline and IWGT consensus-. The 1st International Symposium on the Drug Safety Evaluation (2009.12)

林　真; In vivo 遺伝毒性試験の過去，現在，未来–私のやってきたことと ICH の動き，信州実験動物研究会総会・勉強会・研究発表会，第 71 回勉強会，(2009.03)　信州大学農学部 30 番講義室

林　真; コメットアッセイの国際バリデーション研究，JaCVAM 第 2 回ワークショップ．(2009.04)　国立医薬品食品衛生研究所講堂

Makoto Hayashi; The ICH S2 revision and new movement of the micronucleus assay. The symposium on "Novel Strategies for the Discovery and Development of Safer Drugs". The 3rd Asian Pacific Regional Meeting of ISSX. (2009.05)　Bangkok

Makoto Hayashi; S2(R1) Guidance on Genotoxicity Testing and Data Interpretation for Pharmaceuticals Intended for Human Use. ICH Japan Symposium 2009. (2009.06) Tower Hall Funabori, Edogawa-ku, Tokyo

林　真; In silico 手法による化学物質のヒト健康影響の評価: シンポジウム 5：*In silico* 手法による化学物質の有害性評価の試み．第 36 回日本トキシコロジー学会．(2009.07) 岩手県県民情報交流センター

Makoto Hayashi; The ICH S2 revision and new movement of the micronucleus assay. The 9th International Symposium on Chromosomal Aberrations (ISCA). (2009.07) Rheinfels Castle, St. Goar, Germany

Makoto Hayashi; The historical data. 5th International Workshop on Genotoxicity Testing (IWGT). (2009.08) Biozentrum of the University of Basel, Switzerland

林　真; In vivo 遺伝毒性試験–ICH の動きと課題．静岡実験動物研究会平成 21 年度大会．(2009.10) 掛川市美感ホール

Makoto Hayashi; Peer Review on (Q)SAR for DNA-Binding. OECD Expert Consultation on DNA-binding. (2009.10) OECD, Paris,

France

Makoto Hayashi and Yuki Sakuratani; Development of a Support System for Evaluating the Repeated-dose Toxicity. OECD 2nd Application Tool Box Management Team Meeting. (2009.10) OECD, Paris, France

林　真; 特別講演：環境変異原学と放射線影響学の接点–化学物質のハザードとリスク–. 日本放射線影響学会第 52 回大会. (2009.11) 広島市南区民文化センター

林　真; 化学物質の安全性評価におけるカテゴリーアプローチおよび in silico 評価支援システムの開発. 内閣府総合技術会議の化学物質連係施策群に関するシンポジウム. (2009.12) 新霞ヶ関ビル全社協灘尾ホール

林　真; 反復投与毒性による化学物質の安全性評価–エキスパートジャッジを支援するためのデータベース及びユーザーインターフェースの構築–. 日本化学工業協会ケミカルリスクフォーラム. (2009.12) 住友不動産六甲ビル 2F 会議室

浜田修一，石井宏幸，小谷百合，高澤博修，成見香瑞範，川端政義，箕輪茂徳，中川宗洋，林　真; 3 回投与による小核試験とコメットアッセイのコンビネーション試験法に関する検討. 第 36 回日本トキシコロジー学会. (2009.07) 岩手県県民情報交流センター

山田 隆志，張 慧琪，田中 雄四郎，山田 隼，前川 昭彦，林 真; 反復投与毒性の *in silico* 評価 －毒性作用機序に基づいたメトヘモグロビン血症/溶血誘導物質のカテゴリー化－. 第 36 回日本トキシコロジー学会. (2009.07) 岩手県県民情報交流センター

S Masumori, K Suzuki, Y Furuya, M Ueda, D Mukai, M Maki, M Nakajima, DK Torous, SD Dertinger, M Hayashi; Flow cytometric analysis of micronuclei in rat peripheral blood: Comparison of assay results between two laboratories. The 10th International Conference on Environmental Mutagens. (2009.08) Firenze, Italy

T Morita, M Hayashi, M Nakajima, N Tanaka, DJ Tweats, K Morikawa, T Sofuni; Practical decision tree for germ cell mutagens in GHS classification. The 10th International Conference on Environmental Mutagens. (2009.08) Firenze, Italy

T. Suzuki, A. Kohara, A. Ramadan, Y. Kikuchi, M. Honma, M. Hayashi. Comparative study on in vivo genotoxicity of ochratoxin A and aristolochic acid as a causative for the Balkan endemic nephrophasy. The 10th International Conference on Environmental Mutagens. (2009.08) Firenze, Italy

M Honma, K Yamakage, B Burlinson, P Escober, K Pant, A Kraynak, M Hayashi, M Suzuki, R Corvi, Y Uno, L Schechtman, R Tice, H Kojima; International validation study of the in vitro alkaline comet assay. The 10th International Conference on Environmental Mutagens. (2009.08) Firenze, Italy

Y Uno, H Kojima, M Honma, RR Tice, R Corvi, L Schechtman, M Hayashi. In vivo comet assay: update onon-going international validation coordinated by JaCVAM; The 10th International Conference on Environmental Mutagens. (2009.08) Firenze, Italy

M Yasui, N Koyama, T Koizumi, M Sakuraba, Y Takashima, M Hayashi, K Sugimoto, M Honma; Life cycle on micronucleus analyzed by confocal live cell imaging. The 10th International Conference on Environmental Mutagens.

(2009.08) Firenze, Italy

H Takasawa, H Suzuki, I Ogawa, Y Shimada, K Kobayashi, Y Terashima, H Matsumoto, R Ohta, K Oshida, J Tanaka, C Aruga, N Ikeda, T Suzuki, T Hagiwara, S Hatakeyama, K Nagaoka, J Yoshida, T Imamura, A Miyazaki, Y Saitou, S Minowa, M Kawabata, M Hayashi; Summary of collaborative studies of liver micronucleus assay in young rats–JEMS.MMS collaborative study group. The 10th International Conference on Environmental Mutagens. (2009.08) Firenze, Italy

S Hamada, H Ishii, Y Kotani, H Takasawa, K Narumi, M Kawabata, S Minowa, R Takashima, M Nakagawa, M Hayashi; Evaluation of a specific mthod for integrating genotoxicity test into general toxicity test. The 10th International Conference on Environmental Mutagens. (2009.08) Firenze, Italy

RV Williams, A Cayley, CA Marchant, RT Naven, M Hayashi, A Hirose, E Kamata; Directing genotoxicity testing to assist in the development of in silico models. The 10th International Conference on Environmental Mutagens. (2009.08) Firenze, Italy

N Asano, DK Torous, CR Tometsko, S Dertinger, M Hayashi; Practical threshold for micronucleated reticulocytes induction observed for low doses of acryl amide and potassium bromate by acridine orange supravaital staining and flow cytometer methods. The 10th International Conference on Environmental Mutagens. (2009.08) Firenze, Italy

Kojima H, Yamakage K, Burlinson B, Escober P, Pant K, Kraynak A, Hayashi M, Corvi R, Uno Y, Schechtman L, Tice R, Honma M; International Validation Study of the In Vitro Alkaline Comet Assay. 8th International Comet Assay Workshop. (2009.08) University of Perugia, Perugia, Italy

Nakajima M, Masumori S, Tanaka J, Hayashi M, Uno Y, Kojima H, Tice R; An Atlas of Comet images: JaCVAM Initiative International Validation Trial for the In Vivo Comet Assay. 8th International Comet Assay Workshop. (2009.08) University of Perugia, Perugia, Italy

M. Hayashi, Y. Uno, M. Honma, T. Morita, N. Asano, M. Nakajima, R. Corvi, R. Tice, L. Schectmann, H. Kojima; In vivo comet assay: upate on the on-going international validation study. 7th World Congress on Alternatives and Animal Use in the Life Sciences. (2009.08) Rome, Italy

M. Honma, H. Kojima, T. Morita, Y. Uno, N. Asano, M. Nakajima, R. Corvi, R. Tice, L. Schectmann, M. Hayashi; International validation study of the in vitro alkaline comet assay. 7th World Congress on Alternatives and Animal Use in the Life Sciences. (2009.08) Rome, Italy

Y. Sakuratani, S. Sato, S. Nishikawa, J. Yamada, A. Maekawa, M. Hayashi; Categorization of chemicals for repeated dose toxicity. 7th World Congress on Alternatives and Animal Use in the Life Sciences. (2009.08) Rome, Italy

T. Okada, N. Ohmori, S. Mori, H. Horikawa, M. Yamakawa, Y. Sakuratani, T. Yamada, M. Hayashi; Knowledge base of basic active structures from twenty-eight-day repeated dose toxicity test data in rats. 7th World Congress on Alternatives and Animal Use in the Life Sciences. (2009.08)

Rome, Italy

R. Corvi, M. Aardema, M. Hayashi, S. Hoffmann, C. Thomas, L. Schechtman, Ph. Vanparys, J. Kreysa; Cell transformation assays: current status. 7th World Congress on Alternatives and Animal Use in the Life Sciences. (2009.08) Rome, Italy

M. Hayashi; Development of a support system for evaluating the repeat-dose toxicity of untested chemicals. 7th World Congress on Alternatives and Animal Use in the Life Sciences. (2009.08) Rome, Italy

田中 仁, 向井大輔, 夏目匡克, 赤堀文香, 中嶋 圓, 林 真; *N*-ethyl-*N*-nitrosourea を処理したトランスジェニックラットを用いるcII 遺伝子突然変異試験および Pig-A 遺伝子突然変異試験. 日本環境変異原学会 第38回大会(静岡) (2009.11) 清水テルサ

益森勝志, 笠本佐和子, 鈴木健一郎, 古屋有佳子, 上田摩弥, 向井大輔, 牧田真輝, 中嶋 圓, 林 真, D. K. Torous, S. D. Dertinger; フローサイトメトリーを用いるラット末梢血液中の小核赤血球の測定:施設間による影響評価. 日本環境変異原学会 第38回大会(静岡) (2009.11) 清水テルサ

上田摩弥, 笠本佐和子, 田中 仁, 向井大輔, 岩倉佳奈子, 中嶋 圓, 林 真; コメットアッセイおよび小核試験の一般毒性試験への併合の検討-採血による試験結果への影響-. 日本環境変異原学会 第 38 回大会(静岡) (2009.11) 清水テルサ

安井 学, 小山直己, 高島良生, 林 真, 杉本憲治, 本間正充; 共焦点ライブセルイメージングによって明らかとなった小核のライフサイクル. 日本環境変異原学会 第 38 回大会(静岡) (2009.11) 清水テルサ

鈴木孝昌, 小原有弘, ラマダン アリ, 菊池 裕, 本間正充, 林 真; バルカン腎症の原因物質としてのアリストロキア酸およびオクラトキシンA. 日本環境変異原学会 第38回大会(静岡) (2009.11) 清水テルサ

Naya M, Kobayashi N, Ema M, Nakanishi J. (2009) Comparable pulmonary toxicity study of different size of crystalline silica in rats: micron vs. nano-size. The 46th Congress of the European Society of Toxicology, September 13-16, Dresden, Germany

Ema M, Naya M, Yoshida K, Nagaosa R. (2009) Toxicity of degradation products of refrigerants. The 46th Congress of the European Society of Toxicology, September 13-16, Dresden, Germany

永翁 龍一、梶原 秀夫、吉田 喜久雄、江馬 眞 (2009) 閉鎖空間内での空調および空調機器からの冷媒漏洩に関する数値流体力学的研究、2009 年度 日本冷凍空調学会 年次大会、2009 年 10 月 21 日

Ema M, Naya M, Yoshida K, Nagaosa R. (2010) Reproductive and developmental toxicity of degradation products of refrigerants. The 49th Annual Meeting of the Society of Toxicology. March 7-11, 2010, Salt Lake City, USA

Naya M, Ema M, Kobayashi K, and Nakanishi J. (2010) Pulmonary Toxicity Assessment of Multi-wall Carbon Nanotubes after Single Intratracheal Instillation in Rats. The 49th Annual Meeting of the Society of Toxicology. March 7-11, 2010, Salt Lake City, USA

Igarashi, Y., Okuno, Y., Minowa, Y., Nakatsu, N., Ono, A., Yamada, H., Ohno, Y. and Urushidani, T..The comparison of toxicogenomics data using the gene set enrichment analysis for bridging between in vivo and in vitro..*Society of Toxicology 49th Annual meeting*, SaltLakeCity, USA. (2010.3)

Minowa, Y., Nakatsu, N., Ono, A., Kanki, M., Okuno, Y., Yamada, H., Ohno, Y. and Urushidani, T..Discrimination between gene expression changes in blood that arise from liver necrosis and fluctuation of hematocytes using

canonical correlation analysis.*Society of Toxicology 49th Annual meeting*, SaltLakeCity, USA. (2010.3)

Ono A, Takeyoshi M, Bremer S, Jacobs M, Laws S, Sozu T and Kojima H.. The International Validation Study for The ER alpha STTA Antagonist Assay Using Hela9903.*The 7th World congress on alternative & animal use in the life sciences.*, (Rome, Italy). (2009.8)

Deal F, Ceger P, Allen D, Gordon J, Pazos P, de Lange J, Bremer S, Nakamura M, Kojima H, Ono A, Tice R and Stokes W. Results of the Repeat Testing of Coded Substances for a Multi-phased International Validation Study of a Stably-Transfected Estrogen Receptor (ER) Transcriptional Activation (TA) Test Method.*The 7th World congress on alternative & animal use in the life sciences.*, (Rome, Italy). (2009.8).

小野敦, 武吉正弘, Bremer, S., Jacobs, M., Laws, S. C., 寒水孝司, 小島肇. HeLa9903 細胞を用いたエストロゲン受容体転写活性化試験によるアンタゴニスト検出法の国際バリデーション.*第22回日本動物実験代替法学会総会*, (大阪). (2009)

Midori Yoshida, Naoki Koyama, , Kaoru Inoue, Miwa Takahashi, Youhei Sakamoto, Yoshikazu Taketa, Yoshiya Shimada, Akiyoshi Nishikawa ; Early depletion of ovarian follicles by prepubertal exposure to gamma ray promotes rat uterine cancer development. 第68日本癌学会学術総会(横浜) (2009.10)

Midori Yoshida, Atsushi Sanbuissho, Shigeru Hisada, Michihito Takahashi, Yasuo Ohno, Akiyoshi Nishikawa; Collaborative work to evaluate ovarian toxicity by repeated dose and female fertility studies in rats: Morphological characteristics of normal cycling ovary in rats and their viewpoints for ovarian toxicity detection. 49th Annual Meeting & ToxExpo (Baltimore, US) (2009.3)

吉田緑; 生殖発性毒性の評価法:;現状と問題点. 第10回日本トキシコロジー学会生涯教育講習会 (岩手) (2009.7)

吉田緑; 通常の反復投与の動物試験による化学物質の雌性生殖器系への影響評価. 第3回 In vivo 実験医学シンポジウム(東京) (2009.12)

吉田緑、武田賢和、島田義也、井上薫、森川朋美、高橋美和、坂本洋平、渡辺元、田谷一善、西川秋佳; 未成熟期の放射線照射による小卵胞の経時的変化. 第26回日本毒性病理学会講演要旨集(金沢) (2010.2)7

R. Kikura-Hanajiri, A. Miyajima-Tabata, M. Sunouchi, M. Kawamura, Y. Goda Metabolic properties of N-OH-MDMA in rat and human, The International Association of Forewnsic Toxicologists 2009 (2009.8)

A Miyajima-Tabata, M Sunouchi, K Mitsunaga, Y Yamakoshi, K Nakazawa, M Usami Sexing of early postimplantation rat embryos by amplification of *Sry* gene in stored 2-DE samples for developmental toxicity studies, The 49th Annual Meeting of the Society of Toxicology (2010.3)

研究成果による特許権等の知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

(該当なし)

2. 実用新案登録

(該当なし)

3. その他

(該当なし)

Ⅱ．研究成果の刊行に関する一覧表

別添４

Ⅱ．研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者名	論文ﾀｲﾄﾙ名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版値	出版年	ﾍﾟｰｼﾞ

雑誌

発表者名	論文ﾀｲﾄﾙ名	発表誌名	巻号	ﾍﾟｰｼﾞ	出版年
Wang J, Sawyer JR, Chen L, Chen T, Honma M, Mei N, Moore MM.	The mouse lymphoma assay detects recombination, deletion, and aneuploidy.	*Toxicol Sci*	109(1)	96-105	2009
Yatagai, F., Sugasawa, K., Enomoto, S., and Honma, M.	An approach to estimation from DSB Repair Efficiency.	*J Radiat Res*	50(5)	407-413	2009
Morita T, Hayashi M, Nakajima M, Tanaka N, Tweats D.J, Morikawa K, Sofuni T.	Practical issues on the application of the GHS classification criteria for germ cell mutagens	*Regul Toxicol Pharmacol*	55(1)	52-68	2009
Pfuhler S, Kirkland D, Kasper P, Hayashi M, Vanparys P, Carmichael P, Dertinger S, Eastmond D, Elhajouji A, Krul C, Rothfuss A, Schoening G, Smith A, Speit G, Thomas C, van Benthem J, Corvi R.	Reduction of use of animals in regulatory genotoxicity testing: Identification and implementation opportunities—Report from an ECVAM workshop	*Mutat Res*	680(1-2)	31-42	2009
Takahashi M, Sunaga M, Hirata-Koizumi M, Hirose A, Kamata E. and Ema M.	Reproductive and developmental toxicity screening study of 2,4-dinitrophenol in rats.	*Environ Toxicol*	24(1)	74-81	2009
高橋美加、松本真理子、宮地繁樹、菅野誠一郎、菅谷芳雄、平田睦子、広瀬明彦、鎌田栄一、江馬　眞	OECD化学物質対策の動向（第15報）－第25回、第26回OECD高生産量化学物質初期評価会議（2007年ヘルシンキ、2008年パリ）	*化学生物総合管理学会誌*	5(2)	193-200	2009
Makris S, Solomon HM, Clark R, Shiota K, Barbellion S, Buschmann J, Ema M, Fujiwara M, Grote K, Hazelden KP, Hew WK, Horimoto M, Ooshima Y, Parkinson M. and Wise LD.	Terminology of developmental abnormalities in common laboratory mammals (version 2).	*Reprod Toxicol*	28(3)	371-434	2009
Hirode, M., Horinouchi, A., Uehara, T., Ono, A., Miyagishima,	Gene expression profiling in rat liver treated with compounds inducing elevation of bilirubin.	*Hum Exp Toxicol*	28(4)	231-244	2009

T., Yamada, H., Nagao, T., Ohno, Y. and Urushidani, T.					
Kondo, C., Minowa, Y., Uehara, T., Okuno, Y., Nakatsu, N., Ono, A., Maruyama, T., Kato, I., Yamate, J., Yamada, H., Ohno, Y. and Urushidani, T.	Identification of genomic biomarkers for concurrent diagnosis of drug-induced renal tubular injury using a large-scale toxicogenomics database.	*Toxicology*	265(1-2)	15-26	2009
Yoshida M, Sanbuissyo A, Hisada S, Takahashi M, Ohno Y, Nishikawa A.	Morphological characterization of the ovary under normal cycling in rats and its viewpoints of ovarian toxicity detection.	*J Toxicol Sci*	34 Suppl 1	SP189-97	2009
Yoshida M, Watanabe G, Suzuki T, Inoue K, Takahashi M, Maekawa A, Taya K, Nishikawa A.	Long-term treatment with bromocriptine inhibits endometrial adenocarcinoma development in rats.	*J Reprod Dev*	55(2)	105-9	2009
A. Miyajima, M.Sunouchi, K.Mitsunaga, Y. Yamakoshi, K. Nakazawa, M. Usami.	Sexing of postimplantation rat embryos in stored two-dimensional electrophoresis samples by polymerase chain reaction of an Sry sequence.	*J Toxicol Sci*	34(6)	681-685	2009

Ⅲ．研究成果の刊行物・別刷

TOXICOLOGICAL SCIENCES 109(1), 96–105 (2009)
doi:10.1093/toxsci/kfp037
Advance Access publication February 23, 2009

The Mouse Lymphoma Assay Detects Recombination, Deletion, and Aneuploidy

Jianyong Wang,*,[1] Jeffrey R. Sawyer,† Ling Chen,*‡ Tao Chen,* Masamitsu Honma,§ Nan Mei,* and Martha M. Moore*,[2]

*Division of Genetic and Reproductive Toxicology, National Center for Toxicological Research/ Food and Drug Administration, 3900 NCTR Road, Jefferson, AR 72079; †Cytogenetics Laboratory, Department of Pathology, University of Arkansas for Medical Sciences, Little Rock, AR 72205; ‡College of Life Science and Technology, Shanghai Jiao Tong University, Shanghai, China; and §Division of Genetics and Mutagenesis, National Institute of Health Sciences, Tokyo 158-8501, Japan

Received October 31, 2008; accepted January 29, 2009

The mouse lymphoma assay (MLA) uses the thymidine kinase (*Tk*) gene of the L5178Y/*Tk*$^{+/-}$-3.7.2C mouse lymphoma cell line as a reporter gene to evaluate the mutagenicity of chemical and physical agents. The MLA is recommended by both the United States Food and Drug Administration and the United States Environmental Protection Agency as the preferred *in vitro* mammalian cell mutation assay for genetic toxicology screening because it detects a wide range of genetic alterations, including both point mutations and chromosomal mutations. However, the specific types of chromosomal mutations that can be detected by the MLA need further clarification. For this purpose, three chemicals, including two clastogens and an aneugen (3′-azido-3′-deoxythymidine, mitomycin C, and taxol), were used to induce *Tk* mutants. Loss of heterozygosity (LOH) analysis was used to select mutants that could be informative as to whether they resulted from deletion, mitotic recombination, or aneuploidy. A combination of additional methods, G-banding analysis, chromosome painting, and a real-time PCR method to detect the copy number (CN) of the *Tk* gene was then used to provide a detailed analysis. LOH involving at least 25% of chromosome 11, a normal karyotype, and a *Tk* CN of 2 would indicate that the mutant resulted from recombination, whereas LOH combined with a karyotypically visible deletion of chromosome 11 and a *Tk* CN of 1 would indicate a deletion. Aneuploidy was confirmed using G-banding combined with chromosome painting analysis for mutants showing LOH at every microsatellite marker on chromosome 11. From this analysis, it is clear that mouse lymphoma *Tk* mutants can result from recombination, deletion, and aneuploidy.

Key Words: **mouse lymphoma assay; mutation type; loss of heterozygosity; cytogenetics; copy number; 3′-azido-3′-deoxythymidine; mitomycin C; taxol; thymidine kinase.**

The mouse lymphoma assay (MLA), using the thymidine kinase (*Tk*) gene of the L5178Y/*Tk*$^{+/-}$-3.7.2C mouse lymphoma cell line as a reporter gene of mutation, is preferred by a number of international regulatory agencies, including the United States Food and Drug Administration and the United States Environmental Protection Agency, as the *in vitro* mammalian mutation assay in the genetic toxicology screening battery. The decision to prefer the MLA was based on previous research demonstrating that the assay detects most of the mutational events known to be associated with the etiology of cancer and other human diseases, including point mutations and a number of different types of chromosomal mutations (Applegate *et al.*, Blazak *et al.*, 1989; Chen *et al.*, 2002; Clive *et al.*, 1990; 1990; Honma *et al.*, 2001; Hozier *et al.*, 1981, 1992; Liechty *et al.*, 1998; Moore *et al.*, 1985; Zhang *et al.*, 1996).

It is important to determine the various mutation types that can be detected by this assay, so that MLA data can be properly interpreted. Since the development of this assay, quite a number of studies have been conducted to understand the types of mutations that can be detected by the MLA. Several cytogenetic studies have been conducted to analyze *Tk* mutants induced by various mutagens (Blazak *et al.*, 1986, 1989; Hozier *et al.*, 1981; Moore *et al.*, 1985; Zhang *et al.*, 1996). It is clear that many small colony (SC) mutants have recognizable chromosome rearrangements involving chromosome 11, which contains the *Tk* gene. The *Tk*$^{-}$ and *Tk*$^{+}$ chromosomes can be distinguished by a centromeric heteromorphism: the *Tk*$^{+}$ chromosome has a bigger centromere (Hozier *et al.*, 1982; Sawyer *et al.*, 1985). This finding greatly helps the cytogenetic characterization of chromosome aberrations in *Tk* mutants. However, without the help of molecular genetics, small chromosome changes cannot be detected using cytogenetic methods alone; mitotic recombination cannot be identified because the karyotype of the mutant would be normal. Applegate *et al.* (1990) identified a *Nco I* restriction fragment length polymorphism that distinguishes the *Tk*$^{+}$ and *Tk*$^{-}$ alleles. Several studies using Southern blot analysis to determine the status of the *Tk*$^{+}$ allele were subsequently conducted (Applegate *et al.*, 1990; Clive *et al.*, 1990). The

[1] Present address: Office of New Drugs, Center for Drug Evaluation and Research, Food and Drug Administration, HFD-540, 10903 New Hampshire Avenue, Silver Spring, MD 20993.

[2] To whom correspondence should be addressed at Division of Genetic and Reproductive Toxicology, National Center for Toxicological Research/FDA, 3900 NCTR Rd, Jefferson, AR 72079. Fax: 870-543-7393. E-mail: martha.moore@fda.hhs.gov.

presence of the Tk^+ allele suggests an intragenic mutation, while the loss of the Tk^+ allele indicates a chromosome mutation. Most large colony (LC) mutants induced by point mutagens, such as ethyl methanesulfonate, retain the Tk^+ allele; while most SC mutants induced by clastogens, such as bleomycin, lose the Tk^+ allele. An allele-specific PCR technique was developed to identify the presence or absence of the Tk^+ allele. Furthermore, based on microsatellite polymorphisms, the loss of heterozygosity (LOH) pattern of the entire chromosome 11 can be investigated (Liechty *et al.*, 1994, 1996, 1998). This labor-saving approach allows many mutants to be analyzed; however, without the detection of *Tk* gene copy number (CN), one cannot distinguish between a deletion and a recombination event. Southern blot analysis can be used to detect *Tk* gene CN (Applegate *et al.*, 1990), but it is resource intensive, requires a relatively large amount of DNA, and the measurement is not precise (Joseph *et al.*, 1993). Therefore, we developed a real-time PCR method to detect the CN of the *Tk* gene (Wang *et al.*, 2007). By combining LOH analysis of chromosome 11 and cytogenetic analysis, we were able to distinguish between deletion and recombination events.

Another important issue for the MLA is whether the assay can detect aneuploidy. Aneuploidy plays a significant role in many adverse human health conditions, including spontaneous abortions, birth defects, and cancer (Aardema *et al.*, 1998; Duesberg *et al.*, 1999; Oshimura and Barrett, 1986; Sen, 2000). Aneugens can interact with the spindle apparatus or impair its function, thereby inducing aneuploidy due to nondisjunction mechanisms. Several aneugens are carcinogens (Cimino *et al.*, 1986; Oshimura and Barrett, 1986). Although the MLA has been shown to detect aneugens, its ability to adequately detect aneuploidy is unclear. Applegate *et al.* (1990) reported that at least some *Tk* mutants show aneuploidy. Honma *et al.* (2001) evaluated two aneugens, colchicine, and vinblastine, using the MLA. The two chemicals did not induce a significant mutant frequency (MF) increase after the regular 3-h treatment. Although they did show positive responses after the long-term (24 h) treatment, the increase of MF was not high. Therefore, many of the mutants that were isolated and analyzed from the chemical-treated cultures would be spontaneous rather than induced mutants.

Overall, the specific types of chromosomal mutations that are detected by the MLA need further clarification. In this study, *Tk* mutants from cultures treated with different chemicals, including two clastogens and an aneugen (3′-azido-3′-deoxythymidine [AZT], mitomycin C and taxol), were used. A combined strategy of both molecular genetic and cytogenetic methods was used to analyze the mutants. LOH analysis of chromosome 11 was conducted first, and then the *Tk* mutants showing LOH involving a large portion of chromosome 11 were selected for further cytogenetic analysis and *Tk* CN detection. It should be noted that it was not our intent to provide a complete analysis of the types of mutational events induced by these three chemicals; rather, we used these chemicals to give us mutants for our analysis that would be expected to include deletions, mitotic recombination, and aneuploidy.

MATERIALS AND METHODS

Cell culture. The L5178Y/$Tk^{+/-}$ -3.7.2C mouse lymphoma cells were cultured in suspension using Fischer's medium for leukemic cells of mice (Quality Biologicals, Gaithersburg, MD) supplemented with 10% heat-inactivated horse serum, 200 μg/ml sodium pyruvate, 100 unit/ml penicillin, 100 μg/ml streptomycin, and 0.05% (vol/vol) pluronic F68 (Invitrogen, Carlsbad, CA). The cultures were incubated at 37°C in an atmosphere of 5% CO_2 and saturated humidity and maintained in logarithmic growth.

Tk mutant induction. *Tk* mutants isolated from AZT-treated and taxol-treated cultures were from previous studies using the microwell version of the assay (Moore *et al.*, 2005; Wang *et al.*, 2007). For the induction of *Tk* mutants using mitomycin C (obtained from Sigma, St Louis, MO), the protocol for the microwell version of the mouse lymphoma assay described by Chen and Moore (2004) was followed. Briefly, cells were centrifuged and resuspended at a concentration of 0.2×10^6 cells/ml in 50 ml of medium in 75-cm^2 polystyrene flasks. Mitomycin C dissolved in dimethyl sulfoxide (DMSO) was added from a stock solution to the cell cultures. Additional DMSO was added to give a final volume of 100 μL The flasks were incubated for 4 h, and then the cells were centrifuged, washed twice, and resuspended in fresh medium. The cells were transferred to new 75-cm^2 flasks and cultured for 2 days for mutant expression with cell counts and cell density adjustment made after 1 day. Then the cells were cloned in 96-well plates in medium containing 3 μg/ml trifluorothymidine (TFT) for selection and medium without TFT for the measurement of cloning efficiency. After 12 days, the 96-well plates were evaluated by eye using a Quebec dark field colony counter to determine the presence or absence of colonies in each well and to enumerate the number of small and LC mutants. Total MF, SC MF, and LC MF were determined, and the relative total growth values that measures cytotoxicity were calculated according to the published protocol (Chen and Moore, 2004). Mutant colonies were randomly selected and isolated from the cultures treated with the highest test dose of AZT (1 mg/ml), mitomycin C (0.4 μg/ml), or taxol (1 μg/ml), respectively.

DNA extraction. The isolated mutant colonies were cultured in fresh medium for several days to obtain sufficient cells for subsequent analysis. Genomic DNA was extracted from 3×10^6 cells of each *Tk* mutant clone using the Qiagen DNeasy tissue kit (Valencia, CA) and stored at − 20°C.

Tk gene LOH analysis. *Tk* gene LOH analysis was conducted using the allele-specific PCR described by Liechty *et al.* (1996), with some modifications (Wang *et al.*, 2007). Basically, the microsatellite locus *D11Agl2* that resides in the *Tk* gene was amplified using a touchdown PCR method. The PCR was performed in 96-well plates using a PCR System 9700 (Applied Biosystems, Foster City, CA). The reaction products were separated by 2% agarose gel electrophoresis, stained with 1 μg/ml ethidium bromide, and visualized with a UV light box.

Chromosome 11 LOH analysis. In addition to microsatellite marker *D11Agl2*, eight other microsatellite loci on mouse chromosome 11 (*D11Mit 42, 59, 36, 29, 22, 20, 19,* and *74*) were used (Wang *et al.*, 2007). The nine microsatellite loci are almost evenly distributed along the length of the chromosome (with locations at 78.0, 72.0, 58.5, 47.6, 40.0, 25.0, 20.0, 13.0, and 0.0cM, respectively). LOH analysis was performed at each microsatellite locus using allele-specific PCR as previously described (Wang *et al.*, 2007). The PCR products were separated and visualized as above.

Tk gene dosage analysis. For those mutants showing LOH involving a large portion of chromosome 11 (at least including microsatellite markers *D11Agl2* and *D11Mit 42*), *Tk* gene CN was evaluated using the real-time PCR $2^{-\Delta\Delta Ct}$ method described previously (Wang *et al.*, 2007). Briefly, a fragment of the *Tk* gene and a fragment of an unrelated gene (*H-2K*) on chromosome

17 were amplified simultaneously. The *H-2K* gene fragment was used as an endogenous reference for PCR relative quantitation.

According to the criteria set by Honma *et al.* (2001), the CN of *Tk* mutants was classified as <1.2, 1.2–1.8, and >1.8, which sets the ranges for the hemizygous, mosaic, and homozygous states of the *Tk* gene, respectively.

G-banding analysis. For the mutants showing LOH involving a large portion of chromosome 11 (at least including microsatellite markers *D11Agl2* and *D11Mit 42*), G-banding analysis was performed to examine the alteration of chromosome 11. The protocol established by Sawyer *et al.* (1985) was followed with some revision. Briefly, a 12-ml cell culture (approximately 8–10 × 10^6 cells) was centrifuged at 200 × g for 10 min. The supernatant was discarded, and the cell pellet was resuspended with gentle agitation in a hypotonic solution (10 ml 75mM KCl). Then 120 µl of 10 µg/ml colchicine (Sigma) was added. The cell suspension was then incubated at 37°C for 20 min. Five drops of fixative (5:2, methanol:acetic acid) were added at the end of incubation with gentle agitation to avoid cell clumping. Then the cells were centrifuged, and the supernatant was discarded leaving approximately 0.5 ml of solution over the pellet. The pellet was then gently agitated, and 10 ml of fixative was added. After gentle mixing, the cell suspension was incubated at room temperature for 20 min. The cell suspension was centrifuged, and the fixative was changed twice to eliminate cell debris and to ensure good spreading and staining of chromosomes. The cell pellet was resuspended in about 1 ml fixative to make the slides. For karyotypic analysis, cells were dropped onto precleaned glass slides (soaked in 95% ethanol overnight) and air dried. Trypsin treatment before Giemsa staining was used to sharpen bands and increase contrast. At least 10 cells were examined per clone.

Chromosome painting analysis. Chromosome 11 painting analysis was performed as described by Zhang *et al.* (1996) with some modification. Briefly, colchicine was added to a 12-ml cell culture (approximately 8–10 × 10^6 cells) at a final concentration of 0.5 µg/ml. Cells were incubated for 1 h at 37°C in an atmosphere of 5% CO_2 and saturated humidity. Then the cell culture was centrifuged at 200 × g for 10 min and resuspended in hypotonic solution (75mM KCl), followed by incubation in a water bath at 37°C for 20 min. After that, five drops of fixative (3:1, methanol:acetic acid) were added with gentle agitation. The rest of the cell fixation was accomplished using the procedure described in the G-banding analysis section above.

A whole-chromosome painting probe specific for mouse chromosome 11 labeled with biotin was purchased from Cambio (Cambridge, UK). The chromosome painting procedure described in the manufacturer's instructions was followed. Briefly, chromosomal DNA on slides was denatured with 2× sodium chloride-sodium citrate buffer (SSC)-70% formamide solution (1× SSC is 0.15M NaCl + 0.015M sodium citrate) at 70°C for 2 min followed by dehydration through an ethanol series (70%, 85%, and 100%). Probes were added to the metaphase preparations. After overnight hybridization at 37°C, the slides were washed three times with 2× SSC-50% formamide solution and three times with 2× SSC at 45°C. The slides were then incubated with fluorescent avidin-DCS (Vector Laboratories, Burlingame, CA) solution at 37°C for 30 min and washed with 2× SSC containing 0.1% Tween 20. The slides were then incubated with biotinylated goat anti-avidin DCS (Vector Laboratories) at 37°C for 30 min followed by a second fluorescent avidin-DCS treatment. The slides were washed, counterstained with propidium iodide solution, and mounted. At least 10 metaphases from each slide were examined with fluorescence microscopy.

RESULTS

The *Tk* MFs for the AZT-, mitomycin C–, and taxol-treated cultures used for mutant analysis are shown in Table 1. The complete MF data for AZT can be found in Wang *et al.* (2007), for taxol in Moore *et al.*, (2005), and for mitomycin C in Figure 1. At the highest dose tested, all three chemicals induced high *Tk* MFs (4.8-, 16.6-, and 7.3-fold over the concurrent negative control for AZT, mitomycin C, and taxol, respectively). This indicated that most of the analyzed *Tk* mutants were chemical-induced mutants rather than spontaneous background mutants.

TABLE 1
***Tk* Gene MFs in Mouse Lymphoma Cells Treated with AZT, Mitomycin C, and Taxol (at the Highest dose Tested)**

			Tk MF (× 10^{-6})	
Chemical	Concentration	SC[a] (%)	Control	Treated culture
AZT[b]	1 mg/ml	65%	84	407
Mitomycin C	0.4 µg/ml	44%	56	928
Taxol[c]	1 µg/ml	41%	50	366

[a]SC mutants, as a percent of all *Tk* mutant colonies obtained.
[b]Data from Wang *et al.* (2007).
[c]Data from Moore et al. (2005).

For our detailed analysis to determine if mutants can result from deletion, mitotic recombination, and aneuploidy, we needed mutants with large chromosomal alterations. Therefore, a number of mutants were first screened using nine microsatellite markers spanning chromosome 11. Mutants showing partial chromosome 11 LOH including at least microsatellite markers *Agl2* and *Mit42* were selected for further analysis using G-banding. In addition, *Tk* gene CN of these mutants was evaluated. Chromosome painting analysis was performed for some of the mutants showing LOH at every chromosome 11 microsatellite marker.

Fifteen mutants from the 1-mg/ml AZT–treated culture (Wang *et al.*, 2007) showing LOH including at least microsatellite markers *Agl2* and *Mit42* were analyzed using G-banding analysis. Nineteen mutants from the 0.4-µg/ml mitomycin C–treated culture were analyzed using chromosome 11 LOH analysis; then four mutants showing partial chromosome 11 LOH were analyzed using *Tk* gene dosage analysis and G-banding analysis, and two mutants showing LOH at

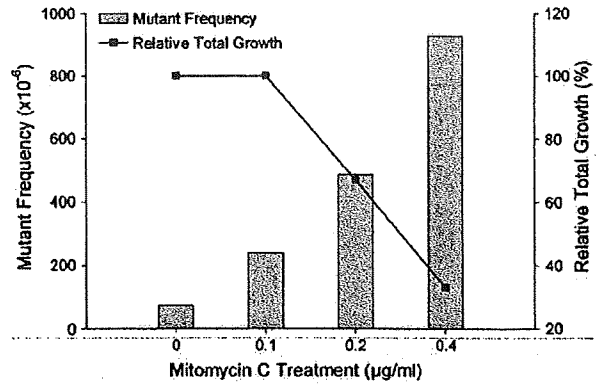


FIG. 1. *Tk* gene MFs and relative total growth values of mouse lymphoma cells treated with mitomycin C.

TABLE 2
The Number of Mutants that were Analyzed Using G-banding Analysis or Chromosome Painting Analysis

Treatment	LOH pattern	Number of mutants analyzed using G-banding analysis	Number of mutants analyzed using chromosome painting analysis
1 mg/ml AZT	Partial LOH including at least microsatellite markers *Agl2* and *Mit42*	15	
0.4 μg/ml mitomycin C	Partial LOH including at least microsatellite markers *Agl2* and *Mit42*	4	
	Complete LOH		2
1 μg/ml taxol	Complete LOH		7

every microsatellite marker on chromosome 11 were analyzed using chromosome painting analysis. Twenty mutants from the 1-μg/ml taxol–treated culture were isolated for chromosome 11 LOH analysis, and seven mutants showing LOH at every microsatellite marker on chromosome 11 were analyzed using chromosome painting analysis. The number of mutants that were analyzed using the combined strategy is summarized in Table 2.

The results of the G-banding analysis can be classified as normal chromosome 11, visible deletion, or complex chromosome alterations. The number of chromosome 11 revealed by the chromosome painting analysis can be classified as one (indicating chromosome loss), two (indicating chromosome duplication after loss), or more than two (including either aneuploidy or polyploidy). The numbers of metaphase spreads showing different numbers of chromosome 11 as revealed by chromosome painting are shown in Table 3. The combined results of the chromosome 11 LOH analysis, *Tk* CN detection, and G-banding/chromosome painting analysis are shown in Table 4.

TABLE 3
The Number of Metaphase Spreads Showing Different Numbers of Chromosome 11 in the *Tk* Mutants Isolated from Mitomycin C– or Taxol-Treated Cultures as Revealed by Chromosome Painting

	Number of chromosome 11				
Mutant[a]	1	2	3	4	>4
ML7	1	9	0	0	0
MS3	3	4	2	1	0
TL2	2	8	0	0	0
TL4	0	9	0	1	0
TL8	3	7	0	0	0
TS2	1	7	0	1	1
TS4	0	8	1	1	0
TS6	0	2	5	0	3
TS7	2	8	0	0	0

[a]The first letter of the mutant name indicates the chemical exposure (M, mitomycin C; T, taxol); the second letter indicates colony size of the mutant (L, large; S, small). All the mutants showed LOH at every microsatellite marker on chromosome 11. Ten metaphase spreads were counted for each *Tk* mutant.

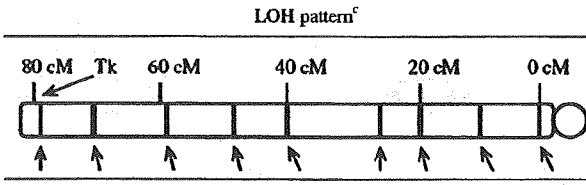
In total, 28 mutants showing partial or complete chromosome 11 LOH were analyzed using this combined strategy. Among them, nine mutants (A1B4, A1B5, A2D4, A3C2, A5B3, A6A2, ML4, ML10, and MS6) retained a normal karyotype, while at least three microsatellite markers showed LOH. With a *Tk* CN of 2, the mutation type of these mutants can be identified as recombination. A representative metaphase cell is shown in Figure 2. Five mutants (A1C6, A3A4, A5C2, A5D6, and A6C2) were identified to be deletions. They all have partial chromosome 11 LOH patterns, one copy of the *Tk* gene, and chromosome 11 showing visible deletions or deletions combined with translocation (representative metaphase cell shown in Fig. 2). Five mutants (A5C6, A5D2, A7B5, A7C1, and MS8) showed complex chromosome alterations. They all have partial chromosome 11 LOH patterns, with more than one copy of the *Tk* gene. G-banding analysis showed that the Tk^- chromosome appears to be normal, while the Tk^+ chromosome is abnormally long (Fig. 3). It is speculated that this complex alteration was the result of multiple events: deletion, duplication (aneuploidy), and translocation. First, the Tk^+ chromosome was partially deleted, which resulted in the LOH pattern; then the Tk^- chromosome was duplicated and translocations occurred. The duplicated Tk^- chromosome was translocated directly to the damaged Tk^+ chromosome or other chromosomes. Mutants A5D2 and MS8 have *Tk* CNs between 1 and 2, indicating that they are mosaic mutants. They may be a mixture of cells with duplicated Tk^- chromosome after the partial deletion of the Tk^+ chromosome or the Tk^- chromosome was not duplicated. For those mutants that showed complete LOH of chromosome 11 (ML7, MS3, TL2, TL4, TL8, TS2, TS4, TS6, and TS7), chromosome painting analysis indicated that they were all mosaic mutants, and overall the major mechanism appears to be the Tk^- chromosome duplication after the loss of the Tk^+ chromosome. Representative photos for chromosome loss and chromosome duplication after loss are shown in Figure 4.

DISCUSSION

A complete evaluation of genetic toxicology data includes an analysis of the mode of action by which the test chemical induced mutation (Dearfield and Moore, 2005). Because there are a number of genotoxicity tests and different tests detect different types of genotoxic damage, they may give a mixture of both positive and negative results. Therefore, it is important to identify the types of mutations detected by the different assays in order to evaluate the data properly.

As mentioned before, it has been established that the MLA can detect both point mutations and chromosomal mutations

TABLE 4
Combined Results of the LOH Analysis, *Tk* Gene CN Detection, and G-Banding/Chromosome Painting Analysis for the *Tk* (Mutants Isolated from AZT-, Mitomycin C–, or Taxol-Treated Cultures



Mutants[a]	L/S[b]	*Agl2*	*42*	*59*	*36*	*29*	*22*	*20*	*19*	*74*	*Tk* CN[d]	G-banding/chromosome painting[e]
A1B4	L	○	○	○	○	○	●	●	●	●	>1.8	Recombination
A1B5	L	○	○	○	○	●	●	●	●	●	>1.8	Recombination
A1C6	L	○	○	●	●	●	●	●	●	●	<1.2	Deletion
A2D4	L	○	○	○	●	●	●	●	●	●	>1.8	Recombination
A3A4	S	○	○	●	●	●	●	●	●	●	<1.2	Deletion
A3C2	S	○	○	○	○	○	●	●	●	●	>1.8	Recombination
A5B3	S	○	○	○	○	○	●	●	●	●	>1.8	Recombination
A5C2	S	○	○	●	●	●	●	●	●	●	<1.2	Deletion
A5C6	S	○	○	○	●	●	●	●	●	●	>1.8	Deletion with aneuploidy
A5D2	S	○	○	○	●	●	●	●	●	●	1.2–1.8	Deletion with/without aneuploidy
A5D6	S	○	○	○	○	●	●	●	●	●	<1.2	Deletion with translocation
A6A2	S	○	○	○	●	●	●	●	●	●	>1.8	Recombination
A6C2	S	○	○	○	●	●	●	●	●	●	<1.2	Deletion
A7B5	S	○	○	○	●	●	●	●	●	●	>1.8	Deletion with aneuploidy
A7C1	S	○	○	○	●	●	●	●	●	●	>1.8	Deletion with aneuploidy
ML4	L	○	○	○	○	●	●	●	●	●	>1.8	Recombination
ML10	L	○	○	○	●	●	●	●	●	●	>1.8	Recombination
MS6	S	○	○	○	●	●	●	●	●	●	>1.8	Recombination
MS8	S	○	○	●	●	●	●	●	●	●	1.2–1.8	Deletion with/without aneuploidy
ML7	L	○	○	○	○	○	○	○	○	○	NA[f]	Chromosome loss/duplication
MS3	S	○	○	○	○	○	○	○	○	○	NA	Chromosome loss/duplication
TL2	L	○	○	○	○	○	○	○	○	○	NA	Chromosome loss/duplication
TL4	L	○	○	○	○	○	○	○	○	○	NA	Chromosome duplication
TL8	L	○	○	○	○	○	○	○	○	○	NA	Chromosome loss/duplication
TS2	S	○	○	○	○	○	○	○	○	○	NA	Chromosome loss/duplication
TS4	S	○	○	○	○	○	○	○	○	○	NA	Chromosome duplication
TS6	S	○	○	○	○	○	○	○	○	○	NA	Chromosome duplication
TS7	S	○	○	○	○	○	○	○	○	○	NA	Chromosome loss/duplication

●, retain heterozygosity; ○, LOH.

[a]The first letter of the mutant name indicates the chemical exposure. A, AZT; M, mitomycin C; T, taxol. For mutants from AZT-treated culture, LOH analysis and *Tk* gene CN detection was done in a previous study (Wang *et al.*, 2007).

[b]L, large colony mutant; S, small colony mutant.

[c]*D11Agl2*, *D11Mit 42*, *59*, *36*, *29*, *22*, *20*, *19*, and *74* are nine microsatellite markers that are almost evenly distributed along the length of chromosome 11.

[d]The *Tk* gene CN analysis was performed for mutants showing microsatellite LOH for at least markers *Agl2* and *Mit 42* but also retaining microsatellite heterozygosity for at least marker *Mit 74* (partial LOH of chromosome 11).

[e]G-banding analysis was performed for the mutants showing LOH at least at microsatellite markers *Agl2* and *Mit 42* but also retaining heterozygosity at least at microsatellite marker *Mit 74* (partial LOH of chromosome 11). Chromosome painting analysis was performed for the mutants showing LOH at every microsatellite marker on chromosome 11 (complete LOH of chromosome 11).

[f]Not analyzed.

(Applegate *et al.*, 1990; Chen *et al.*, 2002; Honma *et al.*, 2001; Hozier *et al.*, 1981; Liechty *et al.*, 1998; Moore *et al.*, 1985). A large experimental trial including 45 labs (Honma *et al.*, 1999) suggested that the MLA and the *in vitro* chromosome aberration test were basically "equivalent" as to their ability to give positive responses for clastogens. It is important to recognize that the MLA detects small-scale alterations that are too small to be detected by cytogenetic assays. In addition, the MLA detects recombination, which may lead to recessive mutations and plays an important role in the deactivation of